

いじめにかかわる集団の特性の認知

著者	鈴木 康平, 田口 広明, 田口 恵子
雑誌名	熊本大学教育学部紀要 人文科学
巻	44
ページ	273-279
発行年	1995-12-15
その他の言語のタイトル	Perceived Characteristics of Group Involved in Bullying
URL	http://hdl.handle.net/2298/1044

いじめにかかわる集団の特性の認知

鈴木康平*・田口広明**・田口恵子***

Perceived Characteristics of Group Involved in Bullying

Kouhei SUZUKI*, Hiroaki TAGUCHI** and Keiko TAGUCHI***

(Received September 4, 1995)

We have been investigating into “bullying in school” from the view point of developmental social psychology and group dynamics. The main purpose of this study is to investigate the difference between the characteristics of the group as perceived by bullies and those perceived by victims. Eighty-nine elementary school boys and eighty-eight girls were asked to fill out the questionnaire. As a result, it was found that bullies perceived the group where bullying occurred more positively than victims. And it can be noted that victims’ perceptions of their supporters and the modes of support were different from those of bullies’.

Key words : bullying in school, characteristics of group, supporter for victims.

問 題

われわれは、いじめの問題を発達社会心理学的，集団力学的観点から究明しようと努力を続けている。すなわち，いじめの背景，動機とその対策について考究し（鈴木，1986a），また，いじめの原因について，動機との関わりから分析・検討し（鈴木，1986b，1987），さらに日本社会心理学会や日本心理学会で，いじめについてのシンポジウムの話題提供者（鈴木，1985，1986）としていじめに関する多様な見解に接し考察を重ねてきた。その中で，いじめ根絶は可能か不可能かの認識の違いが，いじめに対する関わりの違いに潜む要因のひとつであることを示唆するデータを小・中学生対象の調査から得た（鈴木，1989a）。しかも，いじめの根絶を可能と見る群と不可能と見る群と，中間群のそれぞれの出現率が小学生，中学生ともにほぼ3割程度ずつであることが示された。さらに大学2年生，教育実習生，そして現職教師に対しての調査でも同様の傾向が示された。そして，いじめ根絶視の3つの程度，すなわちいじめ根絶可能視群，中間群，不可能視群それぞれが，いじめに関しての様々な意見について違いがあることも見いだされた（鈴木，1989a，1989c）。いじめ根絶視といじめの原因の認識の違いも窺えた。これらの結果から，いじめ根絶視といじめに対する態度（とくに，いじめに対する許容度）とは何らかの関わりがあることが強くほのめかされた。この点を深く検討しようとして小・中学生を対象として，いじめ根絶視

1) * 心理学科 ** 荒尾市立荒尾第二小学校 *** 熊本市立河内中学校

2) 本研究は，日本グループ・ダイナミックス学会第42回大会（1994九州大学）において発表されたもののまとめである。

の認識の程度とさまざまな生活態度、幸福観、人生観などにどのような関わりがあるかが検討された(鈴木, 1990)。さらに小学生から中学生、大学生、そして現職教師に至るまでの発達段階の対象者に先のいじめに対する態度と生活態度一般、人生観、価値観などを総合した観点からのデータを収集・分析した(鈴木, 田口, 田口, 1991a)。ついで、いじめ根絶視といじめの場での当事者の認識など、いわゆる学級集団内でのいじめのダイナミックスと当事者の性格の把握に視点を向け、資料の収集に向かった(鈴木, 田口, 田口, 1991a, 1991c, 1992a, 1992b, 1992c)。そこでは、いじめる者といじめられる者によるいじめの場での集団構造の認知のあり方を探り、いじめる立場といじめられる立場では、いじめ発生の場の認識に差があることを示唆する資料を得た。

本研究は、これらの知見をふまえた上で、小学生のいじめ発生の場の集団についての両者の立場からの認知の違いを詳しく調べることを目的とし、いじめられる者をサポートする友達の存在の認知も、いじめられている者といじめている者の視点からはその見方に差異が生じているのかどうかについても考察をおこなっていく。

そこで、われわれが設定したおもな仮説は、「いじめた者といじめられた者とは、いじめが生じた場の集団の認知が異なるであろう。いじめた者はいじめ発生の場(集団)の認知を、いじめられた者よりポジティブに認知し、いじめられた者はそれをネガティブに認知する傾向があるであろう。」「いじめられた者をサポートする友達の存在とサポートの仕方については、いじめられた者といじめた者とは食い違った認知をするであろう。特にその仕方については、いじめられた者は精神的な面での相談などを、いじめた者は外面的な行動をより強くサポートと認知するであろう。」というものである。

方 法

調査対象者：小学6年児童 男89名 女88名、合計177名

調査期日：平成6年6月

調査方法：質問紙調査法による。学級単位の集合一斉調査。教示者は、各学級担任教師

調査項目及びその概要：〔1〕いじめられた経験の有無 1. いじめられた時期 2. いじめられ方 3. いじめられていた時の集団の種類(学級、部活、その他) 4. その集団の雰囲気 5. その集団の特質 6. その集団に対しての準拠意識の強さ 7. いじめられていた時のサポーターの存在の有無とその特性、いじめた人の仲間の有無とその特性、傍観者の存在の有無とその特性、無関心グループの存在とその特性の認知 〔2〕いじめた経験の有無 これについても上述の1から7までと同様な視点からの質問をする。〔3〕いじめ一般についての意見 1. いじめは人間の本性か否か 2. いじめは根絶可能か否か、について問うた。

上記の〔1〕〔2〕とも、1, 2については自由記述、3については複数の選択項目の中から該当する項目ひとつを選択、5, 7についてはいくつかの下位項目について5段階評定、4については図1に示すような「明るい—くらい、あたたかい—つめたい、…すきな—きらいな」の10対の項目に対してそれぞれ5段階評定、6は「いじめが発生した集団から早く離れたい—ずっと離れたくない」の5つの選択肢への応答を求めた。また7についてはそれぞれの特質を①その集団の中心的存在 ②その集団の中で信頼されている程度 ③その集団での親交の程度 ④その集団を楽しくしたり活性化する程度についてそれぞれ5段階で評定、特にいじめられている子のサポーターの認知については、いじめられている時はもちろん、いじめている時に、自分がいじめている相

手のサポーターをどのように認知していたかといった視点から質問を設定した。〔3〕については1, 2とも5段階評定で回答を得た。

結果と考察

1 いじめられ—いじめの経験の有無

いじめられた経験がある者は、男子で46.1%, 女子で54.5%であった。それに対し、いじめた経験がある者は、男子で55.1%, 女子で47.7%であった。半数近くの子どもたちがいじめに直接何らかの関わりを持っていることが窺える。

2 いじめの場

ここではいじめの場を「学級」「部活動」「その他」のいずれで起きたかを聞いたが、男女とも「学級」が圧倒的に多かった（いじめの場を「学級」と回答した児童、男子86.5%, 女子78.0%）。

3 いじめのあった集団の雰囲気

集団の雰囲気を示す項目ごとに、立場（いじめられ／いじめ）×性（男／女）の2要因分散分析を施し、その結果を表1に示した。そこでは、「性」の主効果に有意な項目はなかったので男女こみにした結果を図1に示した。立場つまりいじめられ／いじめの主効果が有意であったのは、「あ

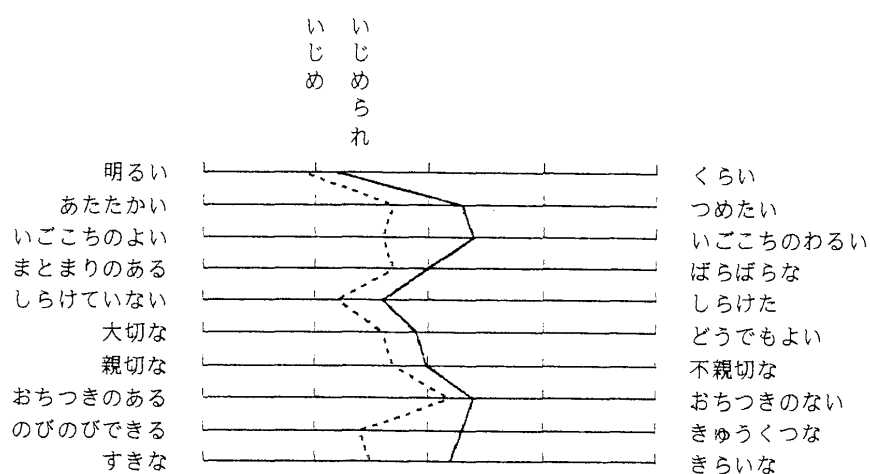


図1 「いじめ」が生起したときの学級（部活動）の雰囲気の認知

表1 「いじめ」が生起した集団の雰囲気の認知についての2要因分散分析（F値を示す）

df	(1) F	(2) F	(3) F	(4) F	(5) F	(6) F	(7) F	(8) F	(9) F	(10) F
A (立場) 1	1.823+	13.662**	16.653**	2.844+	7.809**	1.344	1.961	2.170	18.513**	8.066**
B (性) 1	0.269	0.038	0.313	0.382	0.904	2.080	0.544	1.671	2.682+	1.029
A × B 1	0.874	0.946	0.028	2.844+	0.140	1.094	0.346	0.869	0.001	0.023
Error 176										

+ $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

だたかい一つめたい、いごちのよいーいごちのわるい、しらけていないーしらけた、のびのびできるーきゅうくつな、すきなーきらいな」の5対の項目で(1%の有意水準)、「まとまりのあるーばらばらな」が10%の水準で有意な傾向が示された。いずれもいじめられている子はいじめている子より学級(部活動)をネガティブな方向で認知していることが示された。

4 いじめの場となった学級(部活動)の特性の認知

「友達のことを真剣に考え、助けようとする学級、よくまとまっている学級、何かをがんばろうという目標がある学級、一緒にいて楽しく安心していられる学級、リーダーのことをよくきく学級」の5項目それぞれに5段階評定で応答を得た。立場×性の分散分析を施したところ、「一緒にいて楽しい…」の項に「立場」、「性」の両主効果が有意でかつ交互作用も有意であった。即ちいじめられた子はその学級(部活動)をいじめている子より、「一緒にいて楽しく安心していられる学級」ではないと強く感じているのに対して、いじめをした子はこの項目の通り、つまり、楽しく安心する学級(部活動)と考えている。交互作用が有意であったのは、いじめをした男子がこの項に女子のそれを大きく上回って強く賛成、「楽しく安心」する学級であったと答えているところからきている。

5 いじめのあった学級(部活動)への準拠意識

これについては「その学級から早くはなれたい」「その学級の人とあまり会いたくない」「その学級に入っているだけでもいなくてもかまわない」「その学級の人といつも一緒にいたい」「その学級からずっとはなれたい」との5項目のいずれか一つを選ぶよう求めた(表2)。いじめられた子たちの51.7%が「早くはなれたい」と「その学級の人とあまり会いたくない」を選択し、いじめた子たちの52.8%が「その学級の人といつも一緒にいたい」と「その学級からずっとはなれたい」を選択している。準拠意識の強度の項目順に着目すると、いじめられた群といじめた群で対称的

表2 「いじめ」が生じた学級(部活動)への準拠意識

		①		②		③		④		⑤	
		n	(%)	n	(%)	n	(%)	n	(%)	n	(%)
いじめられ	N=89	17	(19.1)	29	(32.6)	19	(21.3)	13	(14.6)	11	(12.4)
いじめ	N=91	12	(13.2)	8	(8.8)	23	(25.3)	30	(33.0)	18	(19.8)

①その学級から早く離れたい ②学級の成員とあまり会いたくない ③学級の成員であってもなくても構わない ④学級の成員といつも一緒にいたい ⑤学級からずっと離れたい

な出現率の推移を示しているところは極めて重要な意義を持つ。

6 いじめをとりまく集団の認知(いじめられた時、いじめた時の周りの人々)

いじめられた時のサポーター、自分をいじめた人の仲間、いじめられるのをただ見ていただけの傍観者、無関心のグループそれぞれの存在の認知とそれぞれの人々、グループの特性について尋ねた。また自分がいじめをした時、いじめている相手のサポーターの存在の認知、いじめをした時の自分の仲間、いじめの傍観者、無関心グループの認識などを問うた。その結果を表3に示す。いじめの仲間、傍観者、無関心群については、いじめられている子も、いじめている子もその存在に気づく割合は大して変わらないが、「サポーター」の存在の認知には、いじめられた子の

表3 「いじめ」にかかわる集団の認知（その存在を認知した人数）

		A		B		C		D	
		n	(%)	n	(%)	n	(%)	n	(%)
いじめられた N=89	いた	58	(65.2)	64	(71.9)	35	(39.3)	24	(27.0)
	いなかった	15	(16.9)	10	(11.2)	12	(13.5)	19	(21.3)
	わからない	16	(18.0)	15	(16.9)	42	(47.2)	46	(50.6)
いじめた N=91	いた	22	(24.2)	70	(76.9)	31	(34.1)	15	(16.5)
	いなかった	40	(44.0)	7	(7.7)	12	(13.2)	23	(25.3)
	わからない	29	(31.9)	14	(15.4)	48	(52.9)	53	(58.2)

A：サポーター B：いじめの仲間 C：傍観者 D：無関心

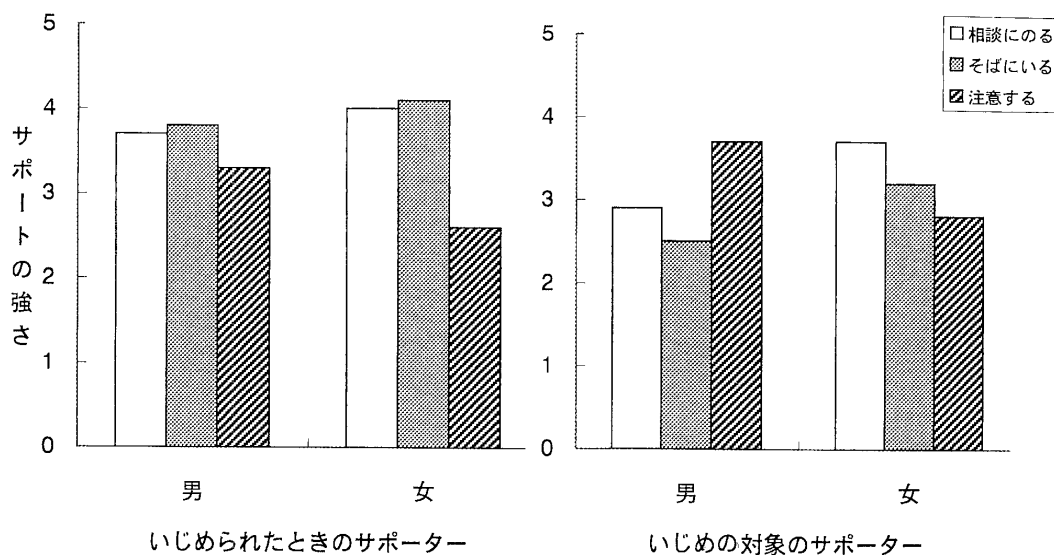


図2 サポーターに対する認知

場合といじめた子の場合とでかなりの食い違いを見せている。

7 いじめられた子のサポーターのサポートの仕方

これについては「相談にのってくれた」「そばにいてくれた」「いじめた相手に注意してくれた」それぞれに5段階評価をしてもらった。その結果を図2に示す。いじめられた子のサポートは男女とも「そばにいてくれた」が最も高い平均値を示したが、いじめる子からみるといじめている相手のサポーターがそばにいることに気づいている割合は有意に低いことが明かとなった。いじめる相手に注意してくれたのは男子のサポーターに有意に多い。

これらのことからいじめの場の集団の認知はいじめられる子といじめる子とではかなりの食い違いがあることが見いだせた。いじめの解明に集団の視点からのアプローチの重要性を示唆している結果といえよう。

謝 辞

本研究をまとめるにあたり、非常にご多忙な中を時間をさいて調査にご協力いただいた小学校の教師各位と児童のみなさんに心からお礼を申し上げます。なお、データ分析にあたり本学部助教授篠原弘章氏によるコンピュータ・プログラムを使用させていただきました。記して、感謝の意を表します。また、データ整理に際して助力をしてくれた学生諸氏にもあわせて謝意を表します。

参 考 文 献

- 江川玟成 1986 いじめから学ぶ一望ましい人間関係の育成— 大日本図書
- 遠藤辰雄 1985 「いじめ」をめぐる非行 教育と医学, **33**, 69-75.
- 古畑和孝 1985a “いじめ”の構造を探る 学習指導研修, **8**(2), 42-48.
- 古畑和孝 1985b 現今の教育問題と社会心理学よりの提言—日本社会心理学会シンポジウム特別報告— 児童心理 **39**(16), 195-204.
- 古畑和孝 1986 「いじめ」問題再考 学習指導研修, **8**(11), 45-48.
- 蜂屋良彦 1986 「いじめ」深刻化の社会的要因は何か 学習指導研修, **8**(11), 52-55.
- 稲村 博 1985 いじめの心理と病理 ジュリスト **No.836**, 23-28.
- 桂 広介・長島貞夫・真仁田 昭・原野広太郎編 1985 いじめを越える!—105人提言—児童心理, **39**(13)
- 桂 広介・長島貞夫・真仁田 昭・原野広太郎 1985 「いじめ」の心理と指導 児童心理, **39**, (16)
- 森田洋司 1985 学級集団における「いじめ」の構造 ジュリスト, **No.83**(6), 29-35.
- 森田洋司 1986 いじめの四層構造論 現代のエスプリ, **No.228**, 57-67.
- 文部省 1984 小学校生徒指導資料3 児童の友人関係をめぐる指導上の諸問題 大蔵省印刷局
- 文部省 1985 生徒指導資料第2集 生徒指導の実践上の諸問題とその解明 大蔵省印刷局
- 文部省 1991 生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について 大蔵省印刷局
- 西日本新聞社社会部取材編 1985 弱者いじめ 西日本新聞社
- 篠原弘章 1984a 行動科学のBASIC第1巻 統計解析 ナカニシヤ出版
- 篠原弘章 1984b 行動科学のBASIC第2巻 実験計画法 ナカニシヤ出版
- 篠原弘章 1984a 行動科学のBASIC第5巻 ノンパラメトリック法 ナカニシヤ出版
- 鈴木康平・佐藤静一・篠原弘章・吉田道雄 1986 いじめの社会心理学的研究 熊本大学教育学部附属教育工学センター紀要, **3**, 97-115.
- 鈴木康平 1986a “いじめ”の背景・動機・対策 学習指導研修, **8**(11), 34-39.
- 鈴木康平 1986b いじめの心理—原因・動機と指導—日本心理学会第50回大会発表論文集, S. 38.
- 鈴木康平 1987 現代社会といじめ再考 教育心理, **35**(1), 6-11.
- 鈴木康平 1989a いじめに対する小・中学生の認識 熊本大学教育実践研究, **6**, 61-81.
- 鈴木康平 1989b いじめに対する教育学部2年次生, 教育実習生, 現職教師の認識 熊本大学教育学部紀要人文科学, **38**, 257-270.
- 鈴木康平 1989c いじめに対する態度 九州心理学会第50回大会発表論文集, 129-130.
- 鈴木康平・田口広明・高木恵子 1989a いじめに対する意見と原因の認識(1) 日本グループ・ダイナミックス学会第37回大会発表論文集, 129-130.
- 鈴木康平・田口広明・高木恵子 1989b いじめに対する意見と原因の認識(2) 日本グループ・ダイナミックス学会第37回大会発表論文集, 131-132.
- 鈴木康平 1990 いじめに対する態度と価値観 とくに小・中学生の場合 熊本大学教育学部紀要人文科学, **39**, 285-302.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1990 いじめに対する意見と原因の認識 熊本大学教育学部紀要人文科学, **39**, 303-317.

- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1991a いじめに対する態度と生活意識・価値観 熊本大学教育実践研究, **8**, 79-86.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1991b いじめに対する認識の研究(1) 日本グループ・ダイナミックス学会第39回大会発表論文集, 69-70.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1991c いじめに対する認識の研究(2) 日本グループ・ダイナミックス学会第39回大会発表論文集, 71-72.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1992a いじめに対する認識の発達社会心理学的研究—いじめ根絶視と「いじめ—いじめられ」の当事者に対する認知の観点から— 熊本大学教育学部紀要, **41**, 213-226.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1992b 「いじめ—いじめられ」の場の認知(1) —いじめへの態度と「いじめ—いじめられ」の場としての学級の雰囲気 日本グループ・ダイナミックス学会第40回大会発表論文集, 93-94.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1992c 「いじめ—いじめられ」の場の認知(2) —「いじめ—いじめられ」の場における当事者の特性の認知 日本グループ・ダイナミックス学会第40回大会発表論文集, 95-96.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1993 「いじめ—いじめられ」の場の認知—いじめへの態度と「いじめ—いじめられ」の場における学級の雰囲気と当事者の特性の認知— 熊本大学教育学部紀要, **42**, 229-245.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1994 いじめにかかわる集団の特性の認知 日本グループ・ダイナミックス学会第42回大会発表論文集, 90-91.
- 鈴木康平 1995 学校におけるいじめ 教育心理学年報, **34**, 132-142.
- 鈴木康平・田口広明・田口恵子 1995 いじめ場面の集団の認知—いじめ—いじめられの立場から— 日本グループ・ダイナミックス学会第43回大会発表論文集 (印刷中)
- 鈴木康平・山浦一保 1995 いじめについての大学生の体験・認識と生活意識 日本グループ・ダイナミックス学会第43回大会発表論文集 (印刷中)
- 高木 修 1986 いじめを規定する学級集団の特徴 関西大学社会学部紀要, **18**(1), 1-30.
- 託摩武俊 1984 こんな子がいじめる, こんな子がいじめられる 山手書房